

障害者に対する大学生の態度についての研究

— 2001年と2011年の比較 —

0807046

西館 裕子

【目的】

近年、わが国では「ノーマライゼーション」の理念に基づき、障害者が地域社会の中で暮らすための体制を整えてきた。しかし障害者が地域社会で暮らしていくためには、彼らに対する差別問題を解決しなければならない。この障害者に対する差別を解消していくためには、健常者の障害者に対する「態度構造」と「態度の形成要因」を検討することが重要である。

また先行研究によると、ノーマライゼーションの普及は障害者に対する態度をポジティブにするとされている。時代が変化したことで障害者に対する態度にも変化がみられるのではないだろうか。

そこで本研究では、障害者（精神障害者・知的障害者・身体障害者）に対する健常者の態度構造について調べた鈴木（2001）の先行研究を追試したうえで比較を行い、経年による態度の変化を検討することを目的とする。本研究にあたり以下の作業仮説をたてた。

仮説 1: 受容的態度はどの障害においても、2001年より2011年のほうが高くなるだろう。また、受容的態度を構成する因子構造には変化がみられないだろう。

仮説 2: 接近許容度はどの障害においても、2001年より2011年のほうが高くなるだろう。

仮説 3: 知識はどちらの年代においても受容的態度に影響を及ぼすだろう。

仮説 4: 接触経験はどちらの年代においても受容的態度に影響を及ぼすだろう。

【方法】

被験者は北星学園大学の学生 201名（男性 35名、女性 166名）である。

質問紙は精神障害者・知的障害者・身体障害者それぞれに対する受容的態度に関する 16項目、接近許容度に関する 4項目、知識に関する 4項目、接触経験に関する 5項目の他に、3つの障害の区別が出来ているかを問う 6項目から構成される。

【結果と考察】

受容的態度得点は2011年より2001年のほうが高かった。この結果は、経年変化により障害者を見かける回数が増えたためだと考える。ボランティアのような自発的な接触に比べて見かけるといふ受動的な接触は、障害者に対する偏見の態度を増長することがある。この受動的な接触が増えたことによって態度得点に変化がみられたのだろう。なお得点は変化したもの、受容的態度を構成する因子構造には変化がみられなかった。よって仮説 1 は一部が支持された。

接近許容度得点も2011年より2001年のほうが高かった。これも受容的態度と同じく、障害者と出会う機会が増えたことで偏見の態度も増長させてしまう機会を増やしてしまったためだろう。よって仮説 2 は支持されなかった。

知識と接触経験はどちらの年代においても受容的態度と正の相関関係にあった。知識や経験が多いほど受容的態度は高まるといえよう。下位項目について検討したところ、受容的態度に強く影響しているのはボランティア経験の有無であった。ボランティアを通して障害者と触れ合うことで、障害者を受容する気持ちが高まったのだろう。なお、ボランティア以外の項目は強い影響を与えているという結果がみられたところもあったが、年代、障害ともにバラつきがみられ、すべての年代や障害に当てはまるような結果はみられなかった。この結果から仮説 3 は支持されなかった。また仮説 4 はボランティア経験のみ当てはまることから、一部支持されたといえる。しかし、本研究ではボランティア経験の有無のみを問う項目であったため、被験者によってはボランティア経験の内容や回数に違いがみられただろう。今後、受容的態度の高まりがどのようなボランティア経験から得られるのかを明らかにするためには、ボランティア経験の内容や回数などとの関連を検討していく必要があると思われる。

（指導教員 豊村 和真 教授）